

● 体験学習プログラム ～国際社会や地域の課題に目を向け、視野を広げる～

ボランティア・NPO 活動センターは、学生が長期休暇を利用して国内の遠方地域や治安・衛生環境が安全と判断される海外を訪問し、その地域が抱える問題に触れるとともに、地域貢献、福祉、環境関連の現地 NPO・NGO などとの交流を通して、その課題解決の取り組みなどを学ぶ『体験学習プログラム』を、夏季と春季の休暇期間に実施しています。

異文化間における相互理解と共生を学ぶ海外プログラムでは、学内の専任教員が企画・引率する2コースと、NPO・NGO 団体が実施する海外のスタディーツアーの中から採択した、学生にとって学びの多い4コースを実施しました。

また、海外に比べて費用面でも参加しやすい国内プログラムでは、地域のさまざまな課題にも目を向け視野を広げる内容で、学内の専任教員が企画・引率するものを、2コース実施しました。

さらに、各季の全コースが終了した後に実施する参加学生によるふりかえりを兼ねた報告会までを一連のプログラムとしており、その報告会を通じて本プログラムで得た経験を共有し、各自がさらに学びを深める機会となるだけでなく、報告会を聴講した学生が次回のプログラムについて参加を考えるきっかけにもなっています。

	プログラム企画者・団体	行先	実施期間
国内	政策学部講師 谷垣 岳人	鳥取県智頭町	2012年8月27日(月)～8月30日(木) 4日間
	経済学部教授 松島 泰勝	沖縄県中南部地域	2013年2月11日(月)～2月14日(木) 4日間
海外	経済学部教授 大林 稔	タンザニア共和国	2012年8月25日(土)～9月8日(土) 15日間
	社会学部教授 舟橋 敏夫	タイ王国	2013年3月6日(水)～3月12日(火) 7日間
	ウータン・森と生活を考える会	インドネシア共和国	2012年8月25日(土)～9月1日(土) 8日間
	特定非営利活動法人 JIPPO	インド共和国	2012年8月25日(土)～9月1日(土) 8日間
	コミュニティ・フォー・チルドレン	フィリピン共和国	2013年3月2日(土)～3月9日(土) 8日間



## ○国内体験学習プログラム／鳥取県智頭町【夏季】

■参加学生	
小澤 史郎 (文学部 仏教学科 3年次生)	桐畑 里奈 (社会学部 コミュニティマネジメント学科 1年次生)
蒲田 侑子 (文学部 史学科 3年次生)	山田 英輝 (社会学部 コミュニティマネジメント学科 1年次生)
暁 南貴 (文学部 史学科 2年次生)	石川 奏輝 (国際文化学部 国際文化学科 3年次生)
高橋 大貴 (文学部 哲学科 1年次生)	青 秀歩 (政策学部 政策学科 2年次生)
太田 実優 (経済学部 現代経済学科 2年次生)	河原 未来 (政策学部 政策学科 2年次生)
三宅恵里奈 (法学部 法律学科 3年次生)	林 佑真 (政策学部 政策学科 2年次生)
江本 恵美 (社会学部 社会学科 2年次生)	竹田 伊織 (短期大学部 社会福祉学科 2年次生)
南 伸之介 (社会学部 社会学科 2年次生)	
■引率教員、テーマ	
谷垣 岳人 (政策学部 講師) 「森を活かしたまちづくり ～ニッポンの新戦略は田舎にあり～」	

■行程			
日時	行程	受入団体など	
8月27日(月)	8:00 13:00~14:30 15:00~16:30 20:30~21:00	深草キャンパスを出発 JR 京都駅経由にて智頭町へ 講義 ・智頭林業の歴史 ・智頭町の林業施策 智頭宿散策 ふりかえり	智頭町長、智頭町森林組合  智頭町建設農林課 智頭町企画課
8月28日(火)	9:00~11:00 13:00~16:00 20:30~21:00	講義 ・智頭町木の宿場プロジェクト “志材”体験 ・間伐体験 ・搬出作業 ふりかえり	智頭町山村再生課  智頭町木の宿場実行委員会
8月29日(水)	9:00~14:00 14:00~17:00 20:30~21:00	視察 ・森のようちえん活動見学 ・園児と一緒に昼食 体験 ・まき割り体験 ・拠点事務所のふすま張替えなど ふりかえり	特定非営利活動法人 智頭町森のようちえん まるたんぼう
8月30日(木)	9:00~11:00 11:30~15:30 15:30 19:00	講義 ・森林セラピーについて 森林セラピー体験 智頭町を出発 JR 京都駅経由、深草キャンパス到着後、解散	智頭町山村再生課  智頭町森のガイドの会

## 小澤 史郎

(文学部 仏教学科 3年次生)

智頭町は面積の93%を山林が占める。そこで、智頭町は山しかないのではなく山があるんだと、今まで価値が見出されてこなかった山を存分に活かす町づくりを行っていた。智頭町で

は町民一人ひとりが町を思い、町のために行動する姿を多く目にした。それが町を動かし、智頭の魅力を生んでいた。

間伐体験では、林業の苛酷な労働とその対価の低さを実感した。そのために山から人々は離れ、山は荒廃していくのだった。林業は補助金

でなんとか生き残っているのが現状である。林業の自立のためには林業や行政側にも問題があるかもしれない。しかし、そのことを批判するだけでは何にもならないというのが、今回智頭で学んだことである。智頭では単に批判するのではなく、問題解決のために自分ができることを行っている。それが今の智頭を動かす大きな力になっている。私は日本の山のために何が可能か考えていく必要がある。私たち消費者は、消費の如何で日本の山・林業を守る力になれる。私たちがこれから経済的に自立し、消費生活を営んでいく中で、自分たちの未来を考えた消費を行っていかなくてはならない。



#### 蒲田 侑子

(文学部 史学科 3年次生)

今回のプログラムで印象に残ったのは、「森のようちえん まるたんぼう」での体験だった。子どもたちは森に入り、自分の好きなことを一生懸命する。先生たちは必要以上に園児に干渉することはなく、そっと見守っている。「森のようちえん」では、子どもたちが自ら考え、行動することを豊かな自然の中で学ぶことができるのだ。

地元の人々は、豊かな自然が当たり前ものにとらえている。「森のようちえん」の活動は、地元以外の人々はもちろん、地元の人々も、智頭町の森林、自然のよさを再認識するひとつのきっかけになると考える。広報活動などの甲斐



あって、町外からの移住者も増えている。快く受け入れる人もいる半面、警戒してしまう人もいようである。警戒心を乗り越え、地元出身者と町外出身者、そして、行政とが協働することで、新たなまちづくりをすすめられるのではないだろうか。

#### 暁 南貴

(文学部 史学科 2年次生)

ボランティアとして初めて訪れた鳥取県智頭町。面積の93%を森林が占めている地域での林業を、いったいどのように成り立たせているのかを実際に見たくて応募した。

林業の作業自体近くで見ることが初めてだった私にとって、一本のスギの木を切り倒すことがどの程度慎重にするべきことなのか、話を聞くまでわからなかった。

切りたい木に対して倒したい方向に「受け口」をいれ、最後に「追口」をいれてゆっくりと倒すといった方法で安全を確保していた。風を頭に入れて倒すから、私が思っていたより緊張感と慎重さがなくてはいけないと知った。

そして、間伐作業をスムーズに進めるためには林道の整備が重要で、森林の奥の間伐をしてそれを市場へと運ぶ労力とスギの売れる価格のつり合いが取れていないため、林道から遠く離れた場所では間伐が進んでおらず、間伐後放置されている木が存在することが分かった。

放置されたスギを地元の特定の店で使用できる「杉小判」に還元し、放置されるスギを減らしていくこともできると学んだ。



#### 高橋 大貴

(文学部 哲学科 1年次生)

人口が急増し、世界的にまだまだ進む消費社会であるであろうこれからは、エネルギー問題

が最大の問題の一つとなっていくでしょう。日本には古来のエネルギー源として森林があります。だから、エネルギー対策の一環として、林業は重要な位置を占めていくと思います。今回の体験先である鳥取県智頭町は、森林が面積の94%を占め、350年以上の歴史を持つ京都の北山、奈良の吉野に並ぶ林業地です。各市町村が過疎や後継者不足に悩まされる中、智頭町では町長を筆頭に「百人委員会」と呼ばれる住民の会を作り、様々な独創的施策を練り出しています。森林セラピーをはじめ、疎開保険や森のようちえんなど、他の市町村では類を見ないような企画があります。環境保護や自然教育を推進していくうえで一番ネックになるのが経済性ですが、智頭町は住民が主体になってそれを乗り越えようとしています。これから先、こういった活動が将来の林業や各市町村のモデルになっていくことを願います。



#### 太田 実優

(経済学部 現代経済学科 2年次生)

智頭町の森林と共に4日間を生活しました。森に囲まれたいろいろの家での生活は、これまでの生活環境と違いが沢山ありすぎて不便だと感じる事もありましたが、それ以上に感心する生活の知恵や、食事の面白み、間伐体験、森のようちえん活動の見学、森林セラピー体験、釜風呂、夜の散歩など沢山沢山、森林と接し触れる事が出来て楽しい日々を過ごす事が出来ました。宿泊先のいろいろの家は涼しい風が吹き抜けて、夜中には鹿の鳴く声が聞こえ、とても落ち着く空間でした。窓から見える風景は森と田んぼです。部屋にコオロギが入ってきたりもしました。私達京都の生活と比べると、田舎と都会の違いです。私は京都に帰って来た時、何処かほっとした気持ちがありました。今ある便利な生活に慣

れてしまっているのだろーと思いました。智頭町に住む人達が私達の都会の生活を経験しに来たとしたら、今後どちらの生活を選択するでしょう。やはり慣れた生活が一番住みやすい環境となるのでしょうか。智頭町での森林と共有する生活を体験する事が出来、とても良い経験

が出来ました。ずっとその生活をするのは今の私には厳しいかもしれませんが、田舎の生活は時間がゆっくり流れて心が安らぐように感じたので、また行きたいという思いが湧きました。



#### 三宅 恵里奈

(法学部 法律学科 3年次生)

今回、森のようちえん「まるたんぼう」を見学させていただいた中で、子どもの育て方について考えることができた。現代の子どもたちは家でゲームをして遊ぶことが増えている中で、あえて自然の中で生活をさせている。自然の中でのびのびと遊ぶことによって、子ども一人ひとりが持つ個性を十分に発揮することができる。また、子どもの社会に大人が深く介入しなくても、何か問題が発生すれば子ども同士で解決することができ、また大人が手助けをしなくても子どもを信じて見守っていれば、子どもが自発的に行動できることもあるということを実感することができた。大人が必要以上に手助けすることで、子どもが自分で考え行動する力が



抑制されてしまい、そのように育てられた結果、大人になってからも自立することができない若者が増えているのではないか。森のようちえんという新しい幼稚園の形は、今の子どもたちの成長に大切な役割を果たしているといえる。

江本 恵美

(社会学部 社会学科 2年次生)

智頭町という町を知っている人は、それほど多くないであろう。さらにそこが、“杉のまち”であることはなお知らないであろう。現在の日本の森林率は高く、木はたくさんあるにもかかわらず出回っていない、木余り状態なのが現状であった。山への関心も薄れていく中で、智頭町が始めた木の宿プロジェクトは、“軽トラとチェーンソーで晩酌を！”を合言葉に、まずは山に興味を持ってもらうことに励んでいた。

そして豊かな自然と、雄大な森林に囲まれたこの町には、大人も子どもも誰もが体を休めることができ、なにかも所有し過ぎていたことに気づき、自然な姿に戻してくれる力を秘めているようであった。

今までは身近にありすぎるがゆえに、関心をあまり持っていなかった山に、今回のプログラムに参加したことによって、興味がわき、これから生きていく中で山に関する選択肢もあるのだと、視野を広げることにつながった。



南 伸之介

(社会学部 社会学科 2年次生)

私は今回の国内体験学習プログラムで森林を活かしたまちづくりを学んだ。鳥取県智頭町は面積の9割が森林で、昔から林業の町として栄えた。今も町のシンボルは杉の木で、様々な所に杉の木が使われており、森は町の誇りであるように感じた。しかし、智頭町は山間地にあるので人口の減少や、少子高齢化、林業の後継者

不足など全国の山間にある町と同じような問題を抱えているのも事実だ。

それを解決するために、智頭町は森のようちえんや森林セラピーなど、森林を上手く活かしながら外の人に町を知ってもらおう取り組みをしていた。森のようちえんは子どもたちの活動のフィールドを森とし、自由に遊びまわることによって体力や創造力をつけることができる。森林セラピーは智頭町の森を専門のガイドと一緒に歩き、心身ともに癒されるというものだ。私が驚いたのは、この2つの取り組みが町民みんな知っていたということだ。「私の街の誇りは何だろう？」と考えると少ししか思い浮かばなかった。私も自分の街の誇りをもっと様々な人にアピールしていかなければならないと考えた。



桐畑 里奈

(社会学部 コミュニティマネジメント学科 1年次生)

8月27日から8月31日まで、鳥取県智頭町にボランティアに行ってきた。智頭町は古くから林業の町として栄えていたようだ。現在も、町の面積の93%が森林に覆われている。だが、私がこのプログラムに参加した理由は林業を知る為ではない。智頭町は、その林業や豊かな自然を活用した「まちおこし」の成功例として有名



である。その手腕を学び、今後の参考にしたいと思い今回のプログラムに参加した。このプログラムを通して感じた智頭町の「まちおこし」成功要因を私は以下のようにまとめる。

- 当たり前の物に付加価値をつける
- 新しい施設を作るのではなく、今ある施設を有効利用する
- 新しい世代の育成を大切にする
- 住民と行政が協力する
- その町の信念を貫き通せる指導者
- 町に住む住民に向けた「まちおこし」をする

### 山田 英輝

(社会学部 コミュニティマネジメント学科 1年次生)

今回私は夏季国内体験学習プログラムで、鳥取県智頭町を訪れた。智頭町は林業(杉)の町として古くから栄えてきた。地元の住民の方々、森林組合の方々を中心となり智頭町の林業を支えてきた。私も実際に間伐体験をさせてもらったが、とても技術が必要で、力が必要であることを身をもって体感した。林業は予想以上にしんどい仕事である。このようなしんどい仕事をやっておられる方々はすごいと思った。また、智頭町は自然豊かな土地柄を活かした森の幼稚園や森林セラピーというものがある。実際にこの二つのものを見学・体験し、智頭町ならではの試みであるということがわかった。このような体験は、都会では体験することが出来ず、今の社会に必要とされている「本物の癒し」というものがこの町にはある。私は、もっと智頭町の良さを知ってもらい、智頭町がどんどん活性化して欲しいと思う。



### 石川 奏輝

(国際文化学部 国際文化学科 3年次生)

伝統的な林業地として栄えてきた鳥取県智頭町において、過疎化が課題となっている。適度に間伐をすることで森林の成長を促し、質の高い木材になる。木材価格の低迷、過疎化による林業離れで間伐が進まない状況である。この状況を打開するため、「木の宿場プロジェクト」の一環として杉小判の流通などによる地域の活性化が注目されている。また、森林セラピーを通じた地域特有の良さといったものを、全国にアピールもされている。

毎日の活動を野外で過ごす幼稚園「まるたんぼう」を訪れ、好奇心旺盛な子どもたちの、感性豊かで活発な様子を目にすることができた。子どもたちに自然の良さを伝えることは大切であるが、過疎化を抑制するための取り組みとしても捉えられる。今後は、日本の伝統産業を維持するため、より多くの人たちに地域特有の良さや自然の良さをアピールしていく必要がある。課題を解決しながら持続可能な社会を築いていくことが重要となる。



### 青 秀歩

(政策学部 政策学科 2年次生)

自然が好きであることと、森を活かしたまちづくりに興味があって参加した国内体験学習プログラム。鳥取県の智頭町に行きました。智頭宿、「森のようちえん」の見学、間伐などの林業体験、まき割りや森林セラピー体験など、充実した時間を過ごしました。そこでは、豊かな自然があり資源が豊富でありながらも、過疎化が進み経済などが衰退している厳しい現状があることを知りました。同じ日本でも、田舎と都会では暮らしに大きな差があることを実感しました。都会に比べ、交通が不便で働く場所も少

なく、都会に若者が出て行ってしまいう原因がわかった気がします。しかし、地形を活かしたさまざまな取り組みがありました。課題はまだありますが、地域活性化をしていくには、森林や歴史などそこにしかないものを最大限に利用していくことが大切であると思います。智頭町には今の日本に失われかけている日本本来の姿がありました。持続可能性の暮らしを目指すヒントがあったと思います。私は今回の体験を通して、都市と田舎の連携を強め、衰退するまちを再生していく方法を考えていきたいと思いました。



河原 未来

(政策学部 政策学科 2年次生)

今回、私は森林や林業を通じ、緑が持つ癒し・憩いのパワーを存分に体感しながら鳥取県智頭町での様々な取り組みや政策について学んできました。今回の体験学習プログラムの中で私が特に印象に残っているのが最終日の森林セラピーです。森林セラピーとは「セラピーロード」と呼ばれる森の中で、森林環境を利用して行う、医学的にも裏付けされている一歩進んだ森林浴のことを言います。森の中に入ってみると五感を通して森の力を感じ、あらゆる神経が研ぎ澄まされるような、なんとも不思議な感覚に包ま



れました。智頭町では、森林は町の大切な資源として捉え、森林セラピーをまちづくりの主要なテーマのひとつと位置づけておられるようで、これを通ずれば智頭町活性化が図れるのでは。と、将来の可能性を感じました。私が智頭町で得たものは、今後、大学生活における学びの中で活かされることだと思いますし、私からもどんどん発信していきたいと感じました。

林 佑真

(政策学部 政策学科 2年次生)

私は今回の国内体験学習プログラムで、田舎暮らしの良さや智頭の町の人たちの暖かさ、また、林業を生業としている人たちの苦悩など、本当にさまざまなことをこの4日間で、見て、聞いて、感じて、まさに五感を使って学んできた。

この4日間、どれも勉強になったが、最も印象に残ったのは間伐体験とその木材搬出作業である。搬出作業では、切った木をメンバーほぼ全員で引きずり出したが、その木も1000円いかどうかという値であると言われ、林業を営む人の苦悩が見えたようだった。

このプログラムの初日にあった町長からのあいさつで、「今の日本は嘘で満ち溢れている、偽物の国である。それでは『本物』とは何か?」とおっしゃっており、「地方にいながらでも、目立たないながらも生きがいをしている、これが『本物』なのではないか、それを見つけていきたい」ともおっしゃっていた。私には何が本



物かを明確に示すことはできないが、今回のこのプログラムで手がかりくらいは見つけたと思う。そしてそれを見失わないよう努力していきたい。

竹田 伊織

(短期大学部 社会福祉学科 2年次生)

かつて緑が覆っていた場所は、都市化に伴ってコンクリートで埋め尽くされた場所が多くなった。それと同時に、人は自然と触れ合いながら生活する機会が減っていると私は考えている。そんな中で森林を活かした智頭町の森林セラピーは、自然に寄り添い、人を健康にしてくれているのだと感じた。

また、智頭町では心だけではなく体の中からの癒しを求めようということでセラピー弁当というものを作っている。このセラピー弁当は、智頭町の食材の8割・米100%が使われており、農業と連携をして地域づくりを同時に行っている。また、この連携は林業とも行われている。

森林セラピーを通して、適度に運動をしながら体を癒していく。また、あまり知らなかった生物や植物について学ぶことが出来る。これらは普段ではなかなか体験できず、しかしとても重要なものだと感じた。森林セラピーなどの今回プログラムで感じた森林の大切さを伝えていきたいと思う。



引率教員講評

谷垣 岳人 (政策学部 講師)

本国内体験学習プログラムの目的は、日本の中山間地での林業の厳しい現状を知り、しかしその現状を打破するために、多様な自然資源を活かした地域活性をおこなっている地元の人々の熱い思いや知恵を実際に見て体験することである。訪問地の智頭町は、林業地としての歴史が長く優良材の生産地だったが、林業の衰退に伴い人口が減少している。しかし近年、官民が

協働して森林の多面的機能を活かした地域活性化策を次々と打ち出している。

参加学生は、初めての間伐体験において使い慣れないノコギリを手に熱心に取り組んでいた。体験後の振り返りにおいては、林業の厳しい現状に対する感想やそれを打開するために消費者が取るべき行動などについて様々な意見が出された。また、園舎を持たず一年を通じて森で活動する「智頭町 森のようちえん まるたんぼう」の取り組み見学では、遠方からも通園させる親が多いことや、子どもの行動を見守るという教育方針に、よい意味でのカルチャーショックを受けた学生が多いようであった。見学後の主催者との質疑応答でも多くの質問が交わされた。

学生たちの感想から、自然資源と日々の暮らしとのつながりを感じることは少なく、林業の現状や農山村の暮らしについてはじめて見聞きすることが多いことがわかった。たとえ身の回りに自然があっても、それを直接利用することがほとんどなくなった現代において、自然資源の利活用を考える本プログラムの意味は大きいと考えられた。

参加学生たちには、これを機会に日本の林産物を日々の暮らしに取り入れるという消費行動を通じて、都市と森林とを結び付け、自然を身近に感じるライフスタイルを実践し伝えていってほしい。

智頭町では町役場をはじめとする多くの方にお世話になりました。この場を借りてお礼を申し上げます。



## ○国内体験学習プログラム／沖縄県中南部地域【春季】

■参加学生	
山本富美子（文学部 哲学科 1年次生）	飯川 椎奈（国際文化学部 国際文化学科 1年次生）
謝 薇薇（経済学部 国際経済学科 2年次生）	勝間田友華（国際文化学部 国際文化学科 1年次生）
鈴木 裕貴（法学部 法律学科 2年次生）	小松 茂樹（政策学部 政策学科 2年次生）
中村 恒輝（法学部 法律学科 1年次生）	富永 玄哲（政策学部 政策学科 2年次生）
友藤 紘菜（国際文化学部 国際文化学科 2年次生）	星野 智子（政策学部 政策学科 1年次生）
■引率教員、テーマ	
松島 泰勝（経済学部 教授）「平和と多文化共生について学ぶ ～多様な沖縄を体感する!!～」	

■行程		
日 時	行 程	受入団体など
2月11日（月） 8：15 9：15 11：30 20：00～	大阪国際空港（伊丹）集合 大阪国際空港発 那覇空港到着、着後昼食 平和ガイドによる戦跡の見学 夕食後、宿へ ふりかえり	平和ガイド 何我我（ぬーがや）
2月12日（火） 10：00 16：00 21：00	沖縄国際大学訪問 ・沖縄国際大学ゼミ生との交流 ・普天間飛行場周辺の見学 まちづくり NPO コザまち社中訪問 ・活動についての講義 ・まち歩き ・NPO 関係者との交流会 車中にてふりかえり	沖縄国際大学 まちづくり NPO コザまち社中
2月13日（水） 9：00 20：30	読谷村内の見学 ・知花 昌一氏の案内 ・シムクガマ、チビチリガマ 昼食後、見学 夕食後宿へ ふりかえり	何我我（ぬーがや） 知花 昌一氏
2月14日（木） 9：00 18：45 20：25	平和記念公園の見学 ・記念碑「平和の礎」、平和祈念資料館 世界遺産の見学 等 ・斎場御嶽（せいふあーうたぎ） 那覇空港発 大阪国際空港（伊丹）着 ・解散	

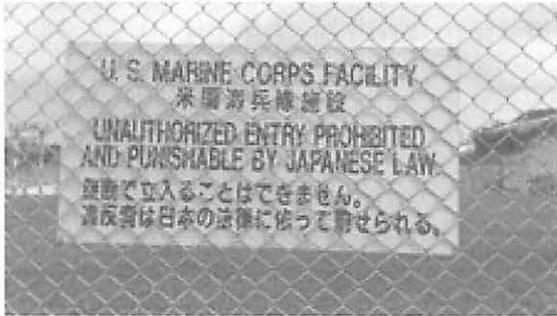
## 山本 富美子

（文学部 哲学科 1年次生）

「私が今まで知っていたのは“表面的な沖縄”であって“本当の沖縄”ではない」ということが最も大きく感じたことである。米軍基地問題や沖縄の歴史と現在まで続いている様々な問題についてこれまで他人事だと考えていた。しかし、実際に現地へ行き当事者の方々のお話を聞

けたことにより、強い衝撃を受け考え方が変わった。その中でも、普天間飛行場を間近で見たときの想いが忘れられない。フェンスの向こう側の光景を目の当たりにしたとき、なぜ日本なのにカルフォルニアの土地なのか、そして、なぜフェンスには“日本人立ち入り禁止”という看板が張られているのか、私には理解できなかった。米軍基地問題について、私はあまりに

軽々しく考えていたことを思い知らされた。このたった四日間でショックもたくさん受けたが、真実を少しでも見聞きすることができたことはとても貴重な経験であった。そして、この経験を自分なりにどう生かしていき、伝えていくかということをしっかり考えていきたいと思う。



謝 薇薇

(経済学部 国際経済学科 2年次生)

世界のさまざまな場所で悲惨な事件、戦争があった。その中に、1931年9月18日の満州事変から沖繩戦を中心とした十五年戦争があった。沖繩県はとても複雑な歴史を持っている。元は琉球王国という独立した王国であり、アメリカ統治時代を経て、最終的には日本の一地方になった。そのため、今、沖繩県にある人権・政治・基地などの問題の多くは未解決のままである。

沖繩のさまざまな問題について情報の真実性を確かめ、解決する方法を考え、現地の人と交流、体験するために、今回のプログラムに参加した。たとえ、答えが出なくても、深く事件の真相を知ることが大切だと思う。

これは私が沖繩を知る第一歩にすぎない。短い四日間に沖繩についてほんの少しふれただけだが、自分の問題として、責任を持ってかわり続けていこうと考えている。自分が現地で聞いたリアルな話を周りの人に伝え、もっと多くの人に沖繩県の問題について関心を持つことを



呼びかけたい。

鈴木 裕貴

(法学部 法律学科 2年次生)

研修先では、歴史を中心に学ばせて頂きました。特に戦中から現在に至るまでの米国間での密接な繋がり、今も戦後から残る当人達には複雑なものがあるのではないかと感じました。歴史や記憶は今も当時の人の心を縛っています。特に戦争の歴史は、故に当時の歴史を経験していない若者は、それを理解するのが難しいのかもしれませんが。僕もその一人であり、戦争という歴史を経験していない若者です。身近な人が理不尽な死に巻き込まれた事がなく、当事者の方の気持ちを想像する事が精一杯でした。今戦争の歴史を知らない世代は、一度深く考える時間が必要ないように感じます。本を読むや、映画を観る程度

でもいいので、戦争というものに関わる事が必要なのではないのでしょうか。

過去の追体験をしたような濃い四日間でした。生の空気に触れ、想像する事が大事だと実感しました。



中村 恒輝

(法学部 法律学科 1年次生)

沖繩を訪れ、ただ行って、見るだけでは気付くことのない様々な体験をしました。

史跡の歴史的説明に不都合なことが記されていないことに驚き、現地の方の説明で隠された意味を知ることができ、本当の意味を理解する難しさを感じました。また説明をうのみにすることなく自分から探ってゆく重要性を認識しました。

そして地元の方との出会い無くして、自身の詰まった貴重な機会になりませんでした。沖繩の深い歴史、魅力的な文化、基地問題を直接お話しすることで、これまで知らなかった事に気づき、自分の心情も変わりました。机上で

は知りえない基地周辺での騒音、危険性を肌で感じ、現地の人が行っている米軍基地に対する運動への見方、考え方を考える契機となり、私も一人の当事者となりました。沖縄には戦争の跡が多く残っており、そこから平和を学ぶ必要があります。また何事にも関心を持ち、考え、行動することが私たちにとって大切なことではないかと強く感じました。



#### 友藤 紘菜

(国際文化学部 国際文化学科 2年次生)

私が今回プログラムから学んだことは実際に現地の人とお話することで得られた、本州では報道されない情報や現地の人々が基地に対して抱く感情やいろんな沖縄の文化です。実際に民家や大学の目と鼻の先にある米軍基地に行きフェンス越しにオスプレイが旋回する姿を見て衝撃を隠しきれませんでした。そして沖縄国際大学の先生や学生のお話を聞き、本州では報道されない情報を知りました。本州で報道されている情報は事柄を切り取ってその一部しか報道されておらず、そんな情報で私は物事を判断していたのだと気付かされました。また私は沖縄がなぜ平和の発信地になっているのかよく分かりませんでした。しかしひめゆりの塔や平和祈念館などを訪れて分かりました。実際に人間の死という現実を見て戦争がいかに残酷なものであるのかを知り二度と戦争が起きてはならない



と思いました。私はプログラムから学んだ問題を考え続け、そして伝えることが今私自身出来る最善のことであると思いました。

#### 飯川 椎奈

(国際文化学部 国際文化学科 1年次生)

これから我々がしていかなければならないことは、沖縄に関心を持ち、考え続け、さらに歴史の重要性を改めて見直すことである。歴史においては、知りたくない、知られたくない事実を包み隠すのではなく、ありのままを伝え、それらを受け止めることが重要である。さらに、政治がおかしな方向へ行ってしまうように、国民自身が賢くなること、そして意思表示していく姿勢が大切である。

平和を考えていく上で、古堅宗光さんの言葉が全てではないだろうか。「目の前にいる人間を1人の人間として見る」ことは、人を大切にすることである。平和の原点は、普段の人との関わりから生まれるものであると私は考える。相手の立場に立ち、自分のこととして考え、それらがつながることによって出来ていくものである。そして一方から物事を見るのではなく、必ず多方面から考えることが最も重要である。

沖縄で感じたことは、あらゆる時事問題において、同じことが言えるのではないだろうか。問題そのものは違っても、根本的な部分においては他と変わらないのかもしれない。

沖縄で感じた「平和の原点」を忘れず、今後の時事問題について考えていきたい。



#### 勝間田 友華

(国際文化学部 国際文化学科 1年次生)

日本政府は沖縄の普天間基地を名護市辺野古へ移設させる動きをとっているが、移設により

これまで沖縄が抱えてきた問題を解決することができるのであろうか。米軍基地があることで沖縄県民は様々なリスクを背負っている。一つ目は米軍ヘリやオスプレイが民家の上空を飛んでいることだ。それも日本とのルールを無視したルートで飛行することもある。そのことで人々の生活に危険と不安を与えている。また日米地位協定があることで米兵が軽い気持ちで悪さを働いてしまうのだ。今基地を移設させても同じ問題が別の場所で起きてしまうだけである。移設よりも先に日米地位協定を改定させるべきであるが、沖縄県だけが改定を求めているため政府は動こうとしない。日本全体が米兵が起こす事件を知れば多くの改定を求める声があるだろう。そのために私たちは報道されない沖縄の情報を様々な手段で広めていくことで沖縄の抱える問題の役に立つことができる。



### 小松 茂樹

(政策学部 政策学科 2年次生)

今回の国内体験学習プログラムでは「平和」について学んだ。出発前の私は基地がすべてなくなれば沖縄は平和になると安易に考えていた。しかし現地の方々の声を聞くうちに、基地がなくなることで働き口がなくなり生活に困る人がいることや、基地が返還されたとしてもその跡地の利用方法によって衰退してしまうまちがあることなどを知り、基地問題とはそんな簡単な話ではないということに気付かされた。

この4日間で実際に基地を見て、戦闘機の騒音を聞き、そして沖縄戦の悲惨な歴史的背景を知ることによって基地に対する反対の思いが強くなったが、しかしただ感情的になくなればいいと主張しては平和には繋がらないのだと思った。その後のまちの形をしっかりと考え、議論していかなければ、返還されたとしてもまた新たな問題がうまれてしまう。

正直今は複雑な気持ちで答えが出せないのだ

が、周りの家族、友人にこの体験を話し、これからも一緒に悩み考えていきたいと思う。ただはっきり言えるのは私にとって沖縄は単なるリゾート地ではなくなったということだ。



### 富永 玄哲

(政策学部 政策学科 2年次生)

沖縄に来て、それぞれの立場から見ると大切さを学んだ。鳥の目とか虫の目とかいうやつだ。命は一つしかないのに、それまでに嫌になるほどたくさんの歴史があって、今の命が存在する。歴史や今までの戦争を知ることと知らないこととは、平和への架け橋にどれだけ距離の差をあたえるだろう。

誰かを認めたくなくて、大きくなって戦争が起こる。知花さんの言葉に教育が間違っていたというのがあったけれど、自らが貫き通す信念に不正解なんてないと思う。「あの時ああしとけばよかったな」というのは無いはずだから、これから沖縄にある課題をもっと見つめていく必要があるはずだ。そして選ぶ選択枝の先に平和があってほしいと思う。何を選んだらいいのかなんて、私が今回このプログラムに参加させてもらって見つけることは出来なかったのだけれど、それでも大切な学びをさせてもらって有難く思います。



星野 智子

(政策学部 政策学科 1年次生)

今回の沖縄県での体験学習プログラムでは、自分の想像をはるかに超える沖縄県の歴史や問題について数多く学ぶことが出来た。訪れた場所すべてが初めて目にするものばかりで、その都度いろいろな感情を抱いた。単なる観光なら、目も向けない展示や解説とじっくり向き合い、地元のガイドさんのとても親切で細かな案内のおかげで、この3泊4日はとても濃く、充実したものになった。

関西の地元に住っては、基地問題などを当事者の気持ちとなって考えることは本当にできない。実際に自分の目で見て、地元沖縄の方々の気持ちを聞かせてもらって初めて、基地と隣り合わせの生活がどんな風かが分かったように思う。

戦跡へ行ったときも、その場の雰囲気には圧倒された。生暖かいチビチリガマの中に残されている当時のままの人骨や生活の跡を見たとき

は、なんとも言えない気持ちになったが、その経験は戦争に関するどんな写真や映像を見るよりも、感じるものがあった。

このような貴重な体験をさせて頂くことで、地元の方々の平和に対する思いの強さを改めて実感し、色々な考え方があることに気付くことができた。今回の学習で学んだことは、何度も振り返って考えたい。そしてまた必ず沖縄へ行って、お世話になった方々に会いに行きたいと思う。



## ○海外体験学習プログラム／タンザニア連合共和国【夏季】

■参加学生	
西岡あゆみ（経済学部 国際経済学科 4年次生）	若菜 悦代（経営学部 経営学科 3年次生）
清 麻梨子（経済学部 国際経済学科 3年次生）	柳 文哉（社会学部 コミュニティ・マネジメント学科 3年次生）
中村 彰秀（経済学部 国際経済学科 3年次生）	熊倉 エリ（政策学部 政策学科 2年次生）
松岡 渚咲（経済学部 国際経済学科 3年次生）	宮岸 李奈（政策学部 政策学科 2年次生）
丸山 紀映（経済学部 国際経済学科 3年次生）	森 優希（政策学部 政策学科 1年次生）
■引率教員、テーマ	
大林 稔（経済学部 教授）「タンザニアで貧困者自立の道をさぐる」	

■行程			
日程	場所	時間	活動内容
8月24日（金）	関西空港	21:30	集合
8月25日（土）	関西空港 発  ドーハ着 ドーハ発 ダルエスサラーム着	0:10	カタール航空
		5:20	空路ドーハへ（所要時間 11時間10分）
		7:35	空路ダルエスサラームへ（所要時間 5時間45分）
		13:20	専用車でホテルへ移動
		18:00	日本人会夏祭り参加  【ダルエスサラーム泊】
8月26日（日）	ダルエスサラーム	終日	ダルエスサラーム 自由時間  【ダルエスサラーム泊】
8月27日（月）	ダルエスサラーム	10:00 15:30	TASAF 事務所訪問 JICA 事務所訪問  【ダルエスサラーム泊】
8月28日（火）	ダルエスサラーム	8:30 10:00 午後	Dogodogo Centre 訪問 MTC 訪問 交流  【ダルエスサラーム泊】
8月29日（水）	ダルエスサラーム	10:00	TASAF サイト訪問（バガモヨ村）  【ダルエスサラーム泊】
8月30日（木）	ダルエスサラーム	午前 午後	CHAWATA 事務所訪問  【ダルエスサラーム泊】
8月31日（金）	ダルエスサラーム	9:00	BRAC 訪問 （現場視察）  【ダルエスサラーム泊】
9月1日（土）	ダルエスサラーム	午前	HAWATA フィールド訪問  【ダルエスサラーム泊】
9月2日（日）	ダルエスサラーム	終日	ティンガティンガ村訪問（ティンガティンガ絵画体験）  【ダルエスサラーム泊】
9月3日（月）	キングルウィラ	9:00 12:00 午後	ミニバスにてダルエスサラーム出発 キングルウィラ村到着 農村滞在  【キングルウィラ泊】
9月4日（火）	キングルウィラ  ミクミ	午前 13:30 15:00	農村滞在 キングルウィラ村出発 ミクミ国立公園にてゲームドライブ  【ミクミ泊】

9月5日(水)	ミクミ ダルエスサラーム	午前 11:00 16:00	ミクミ国立公園にてゲームドライブ ミクミ出発 ダルエスサラーム到着  【ダルエスサラーム泊】
9月6日(木)	ダルエスサラーム ザンジバル	7:00 9:00 午後	フェリーにてザンジバルへ ストーンタウン観光 ビーチ(バジェ)  【バジェ泊】
9月7日(金)	ザンジバル ダルエスサラーム ドーハ	午前 12:05 12:35 18:20 23:45	ザンジバル自由行動 空路にてザンジバル発(PW421) ダルエスサラーム着 カタール航空QR545便にてダルエスサラーム出発 (所用時間:5時間25分) ドーハ到着
9月8日(土)		1:25 17:10	カタール航空QR80便にてドーハ出発 (所用時間:9時間45分)【機内泊】 関西空港到着 解散

西岡 あゆみ

(経済学部 国際経済学科 4年次生)

二週間のタンザニア滞在。とても濃い時間を過ごしてきた。その中で、私がピックアップするのはTASAFについて。TASAFは色々な活動をしているが、説明を聞いたのはキャッシュトランスファーについてだ。キャッシュトランスファーとは最貧困の150万人を対象に、生活保護のお金を渡す仕組みである。お金を渡すターゲットの選定の仕方が興味深い。コミュニティが渡すターゲットを決めるのだ。一番お金が必要な人は誰なのか村人が決める。

私達は実際にTASAFがキャッシュトランスファーを行うバガモヨ村を訪れた。

村人たちが集まってくれ、インタビューが始まった。村人はキャッシュトランスファーによる、ポジティブな効果を話してくれ、今後もこのプロジェクトを続けて欲しいと話していた。

タンザニアでは経済発展と同時に格差が広

がっている。この格差を減らすために貧しい人へお金を再分配すると同時に、貧困者が自立してゆくための支援が必要だと感じた。

清 麻梨子

(経済学部 国際経済学科 3年次生)

今回のスタディツアーで普段当たり前だと思っていたことが、改めて当たり前ではないのだと痛感させられました。事前に聞いていた、水が簡単には飲めないことや十分な水が出ないこと、電気の供給が不十分なことは覚悟していましたし、実際に停電や断水は起きました。また、それ以外のサービスの面においても、日本で受けていた接客サービスなどが素晴らしいのだと改めて気付きました。しかしそんな中で、私達ばかりが発展した生活を送っているのではなく、劣っている部分もあるのではないかと、いう発見もありました。それは昔ストリートチルドレンだった方々との交流の際です。その



方々の話を聞くと、みなしっかりと自立していて、とても強い責任感を持っていました。ストリートチルドレンとして自分と同じ境遇にあった人達とともに更正して、自立を目指すと言っていたのには本当に感心しましたし、その一方で自分の甘えた生活を思い返しました。厳しい環境の中でも自立する姿は見習わなければなりません。このツアーで文化や生活環境の違いだけでなく、人生観においても学ぶことができました。

### 中村 彰秀

(経済学部 国際経済学科 3年次生)

タンザニアにはあまりよいイメージがなかったが、今回の旅でたくさん良い面を見ることが出来た。キンゴルウィラ村では子どもにご飯をあげているお母さんに「おいで」と声を掛けてもらって、見ず知らずの僕をご飯に誘ってくれた。村全体で貧困者を養っていく団結力。あいさつをしても気軽に返事をしてくれる気前のよさ。地面に穴を空けただけのトイレ、水を浴びるだけのシャワー。そんな厳しい環境でも彼らは僕たちを歓迎してくれた。他人と助け合うこれらのようなカリブの精神。日本には欠けているのではないかと思った。国が発展することで彼らの可能性や自由をもっともっと広げてほしいと思う。

自分が置かれている環境に感謝し、これから先、一生懸命生きていきたい。



### 松岡 渚咲

(経済学部 国際経済学科 3年次生)

私は今回このツアーに参加して、たくさんの物を見てたくさんのかんじました。世界の貧困の現状、衣食住が確保されない生活。日本の常識がタンザニアでは全く違うという

こと。

タンザニアにはストリートチルドレンの自立の為の職業訓練施設 Dogodogo Center があります。私はゼミの活動を通じて Dogodogo Center を支援してきました。その Dogodogo Center を訪れると、生徒たちは真剣に、楽しそうに学んでいました。大きな夢を語る生徒もいました。また、自分の夢を叶え、自立している Dogodogo Center の卒業生のお話を聞くこともできました。その方は Dogodogo Center に感謝しており、恩返しをしたいとまで語ってくれました。私は Dogodogo Center の生徒の学んでいる様子や、卒業生の話を聞き、自分たちがしていた支援が少しでも役に立っているということを感じ嬉しく思いました。また、この経験を活かしたより良い支援のあり方を考えたいと思います。



### 丸山 紀映

(経済学部 国際経済学科 3年次生)

私が「タンザニアで貧困者自立の道をさぐる」ツアーに参加した理由。現在タンザニアの貧困者に対して行われている支援についてどのようなものがあるのか。私は実際タンザニアに行って、たくさんのかんじました。その中でも私が特に興味を持った施設の状況や行っている支援



についてのことと思ったこと。貧困者や元ストリートチルドレンだった人の声を直接聞いて私自身が感じたこと。そして、私がこれからすべきこと。

**若菜 悦代**

(経営学部 経営学科 3年次生)

アフリカに行けることと貧困者の自立を学ぶということに興味がかかれて、このツアーに参加した。

印象深かったのは、Dogodogo Centreの卒業生たちとの交流だった。Dogodogo Centreは、子どもたちが基本的権利を享受することをビジョンとしているNGO機関である。

卒業生たちはルールのあるDogodogoでの生活に最初は慣れず、大変だった。しかし仲間と助け合いながらDogodogoでの生活を送る。そしてDogodogoによって夢なども変化していった。

Dogodogoによってストリートチルドレンが助けられ、Dogodogoを卒業しても連携して子どもたちを助けていることに驚いた。この現状をもっと多くの人に知ってもらうために、行動し、発信していく必要を感じた。



**柳 文哉**

(社会学部 コミュニティ・マネジメント学科 3年次生)

タンザニアで体験したことは、日本ではまず味わえないことばかりだった。田舎で未舗装の道を走ったり、都心部であり得ないところを走っての追い越しや割り込み、クラクションが鳴り響くような交通事情。停電や断水がおき、長い間食べていたら飽きてしまう食事や、民族衣装やヨーロッパや中国から流れてくるものを着たりするなどの生活環境。活発さはあるが、同時に治安の悪さで、ポケットに財布を入れて

歩くことが厳しい人ごみ。このような発展途上国ならではの経験をすることが出来た。この経験が、日本の良さを改めて感じさせるものとなったし、同時に、日本にしながら、発展途上国の立場に立って考えることが出来る経験になった。



**熊倉 エリ**

(政策学部 政策学科 2年次生)

私が今回、実際に現地を訪れ、スタディーツアーを終えて感じたことは、日本では何気なく受けられる教育、何気なく食べられる食事、何気なく受けられる医療、など「何気なく」という言葉がどれだけありがたく、そして、恵まれているものか、それを再確認したスタディーツアーでした。kigogo homeのストリートチルドレンの子どもたちが勉強をしたい、というこれこそが教育の本位であり、決して忘れてはいけないことです。そのため、いかに自分の勉強に対する意識が薄れているかとても恥ずかしさを感じ、子どもたちがきらきらと輝いて見えました。

様々な訪問先で日本よりもはるかに貧しく、生きていながらも、だれもが笑顔を決やさない。だれも温かさを絶やさない。むしろ、私は日本より、住みやすさを感じた15日間でもありました。この15日間という短い期間のなかで絶対に



日本では体験することができないことを体験することができて本当によかったです。これからも今後のゼミナール活動でこの「貧困」について取り組み、この体験をいかしていきたいと思っています。

#### 宮岸 李奈

(政策学部 政策学科 2年次生)

私たちはタンザニアというアフリカの国で日本とかけ離れた非日常の生活を経験した。同じ地球で同じ時間を過ごしているのに住む場所が異なるという違いだけでこれほど異なった生活を送っている人々がいるという事実を知った。その生活はテレビで見るだけでは絶対にわからない、想像をはるかに超える生活であった。しかし、そこで暮らす人々は皆人間味溢れるおらかな人たちばかりで日本では感じることでできないような人間味を感じるものがすごく多かった。何を基準としてこの人々を貧しいと言っているのだろうか、水道、電気などの面から見れば日本は確実にタンザニアより発展していると言えるかもしれないがそれが良いことなのか悪いことなのかわからなくなり、そのことを真剣に考えさせられたツアーであった。私たちには非日常であっても現地の人にとっては日常であるということを私たちは常に考えていかなければならないと感じた。



#### 森 優希

(政策学部 政策学科 1年次生)

今回のスタディーツアーにおいて一番大きなカルチャーショックは、障がい者の生活である。まず物乞いをする人の多さに驚いた。収入も少ないため生活も苦しく、それでも自分の辛い部分を商売にする彼らの心情を考えると大変胸が痛い。CHAWATA（身体障がい者の権利を支援する活動団体）を訪問したとき障がい者に話が聞けた。彼らは3時間かけて通勤し、安い給料の中なんとか生活を送っているようだ。かつて、障がい者を擁護するような法律は無く、職場でも受け入れられないなど問題は多くあった。だが、変わってきた良い側面もある。議員に5名の障がい者が受け入れられた、職場に障がい者を受け入れる法律に変わった、障がい者の子どもが学校に通えるようになったなどである。このように、世間の目も変わろうとしているのであれば嬉しい。だが、政府の支援は未だに無い。タンザニアには色々な問題があるが、障がい者も過酷な環境にいることを忘れないでほしい。



## ○海外体験学習プログラム／インドネシア共和国【夏季】

■参加学生	
坪野 洋樹 (経済学部 現代経済学科 4年次生)	山田 万智 (経済学部 国際経済学科 2年次生)
青木 理紗 (経済学部 現代経済学科 2年次生)	
■企画団体、テーマ	
ウータン・森と生活を考える会「希望の村の森づくり～出会おう！植えよう！苗を植えに行くプロジェクト」	

■行程			
日程	場所	時間	活動内容
8月25日(土)	関西国際空港 クアラランブール  ジャカルタ	8:50 16:40 21:40 22:40	集合 タイ航空にて空路クアラランブールへ クアラランブール到着 国内線にて空路ジャカルタへ ジャカルタ到着 到着後ホテルへ移動 【ジャカルタ泊】
8月26日(日)	ジャカルタ バンカランプン  タンジュンハラバン村	9:15 12:30  夜	国内線にて空路バンカランプンへ 空港到着後、車にてクマイ港へ移動 クマイ港より船でタンジュンハラバン村移動 タンジュンハラバン村到着 ウェルカムセレモニー、村の散策 歓迎パーティ 【タンジュンハラバン村ホームステイ泊】
8月27日(月)	タンジュンハラバン村	朝 午前  午後	リバークルーズ アブラヤシ・プランテーション訪問 アグロフォレストリーのレクチャー キャンプリーキーでオランウータン観察 【タンジュンハラバン村ホームステイ泊】
8月28日(火)	タンジュンハラバン村	午前  午後 夜	村のメンバーと苗床見学&植林作業 植林地で昼食 自由時間 村人と交流 【タンジュンハラバン村ホームステイ泊】
8月29日(水)	タンジュンハラバン村	午前 午後 夜	村の小学校訪問 子どもと環境教育プログラム さよならパーティ 【タンジュンハラバン村ホームステイ泊】
8月30日(木)	タンジュンハラバン村  バンカランプン  ジャカルタ	朝  17:05 18:15 19:00	自由時間、村の土産物屋に立ち寄り クマイ港より船でバンカランプンへ移動 車にて空港へ移動 国内線にて空路ジャカルタへ ジャカルタに到着 空港からホテルへ移動 【ジャカルタ泊】
8月31日(金)	ジャカルタ  クアラランブール	午前 午後 19:35 22:35 23:45	NGOのプロジェクト活動地訪問 ジャカルタ市内視察 空港へ移動 空路、クアラランブールへ クアラランブール着 クアラランブール発
9月1日(土)	関西国際空港	7:15	空港着後、解散

坪野 洋樹  
(経済学部 現代経済学科 4年次生)  
昨年、の正月、実家に帰った際にたまたま BS

で見た、オラ・ウータンとそれを取り巻く森林を蝕む伐採の現状を映したドキュメンタリーを見て、最初は日本から遠く離れた国のことで自

分には影響もない僕が何かしてあげられることもないのだろう、と考えていた。しかし今回このツアーを知り、その現状を内側から見ることができ、またその内部に足を踏み入れられるということで参加を決意した。

現地で灼熱の太陽の下行った植林作業はだてではなく、凶暴な蟻と格闘しながら植えた一本には、森林保全に役立ってほしいという希望と同時に、切り取られた木を思うとこの苦勞にも儂さがあった。

直接関わりのないことだと思っていた森林伐採、しかし私たちが普段食べているスナック菓子を作る際に使われるパーム油が原因だったことも知り、より問題を身近に感じたことがなによりもの収穫で、当事者意識を持つことができた。



青木 理紗

(経済学部 現代経済学科 2年次生)

環境問題は全ての人々に関係がある問題です。その環境問題の一つである森林破壊。どこか他人事のように考えている人もいないのでしょうか。

私はインドネシアのボルネオ島で、熱帯林破壊の現状を自分の目で見てきました。私たちが普段食べているお菓子や化粧品。その原材料に植物油脂や食用油と書かれているのを見たことはありませんか。これはパーム油のことです。このパーム油を生産するため、今ボルネオ島では熱帯林が切り開かれ、大規模なプランテーションが行われています。かつてボルネオ島は緑豊かな熱帯林であり、オラ・ウタンなど多くの生物が生息していました。しかし現在、ボルネオ島に元来存在していた自然林の80%が失われてしまったそうです。決して日本に住む私たちも無関係ではありません。消費者は私たちなのです。その事実を自覚し、できるだけ多く

の人々が自然を考慮した消費活動をしていなくてはならないと思います。



山田 万智

(経済学部 国際経済学科 2年次生)

1980年代以降、インドネシアではアブラヤシのプランテーション農園をつくるために森林が伐採され続けています。その現状をこの目で確かめようと私はインドネシアへと旅立ちました。

飛行機からカリマンタン島を見下ろしたときにプランテーション農園が一面にひろがっていた光景は今でも鮮明に覚えています。

私は森林再生という目標掲げる団体、FNPFのリーダーであるバスキさんのもと、植林活動を行いました。日が照りつけるなか、汗びしょびしょで蟻にかまれながら手を泥だらけにして苗を植えました。想像以上に大変な作業でしたが、自分の植えた苗が近い将来再生された森林の一部になるのだということを考えたら嬉しくなりました。しかし、森林が完全に戻るには時間も人もお金も全然足りません。少しでも多くの人がこの現状を知って、力になりたいと思い、行動にうつすことでやっと森林再生に希望の光が見えてくるのでしょうか。たくさんの方が心を動かされて貢献してくれるように、自分が見たこと感じたことをどんどん伝えていきたいです。



## ○海外体験学習プログラム／インド共和国【夏季】

<b>■参加学生</b>	
福島 永久 (文学部 史学科 3年次生)	原 実花 (社会学部 地域福祉学科 3年次生)
西田 大介 (経済学部 現代経済学科 4年次生)	河嶌 倫子 (社会学部 臨床福祉学科 2年次生)
富谷 耕作 (法学部 法律学科 2年次生)	
<b>■企画団体、テーマ</b>	
特定非営利活動法人 JIPPO 「仏跡巡拝とインド福祉村を訪ねる旅」	

<b>■行程</b>			
日 程	場 所	時 間	活 動 内 容
8月25日 (土)	関西国際空港 香港 デリー	12:00 17:45 19:10 20:50	集合、空路香港へ 到着 空路デリーへ 到着、ホテルへ移動 <b>【デリー泊】</b>
8月26日 (日)	デリー	午前 昼 午後 20:20	クトップ・ミナル見学 昼食をとりながら元 JIPPO スタッフ・藤原西見氏と交流 デリー国立博物館見学 ラージ・ガート (ガンジー火葬の記念碑) 見学 ニューデリー駅より夜行列車 (ゴラクダムエクスプレス) 乗車、ゴラクプールへ <b>【車中泊】</b>
8月27日 (月)	ゴラクプール スナウリ・バイラワ テラウラコット ルンビニ	10:55 午後 18:00	ゴラクプール到着 インドーネパール国境で入管手続き後、国境通過 カピラヴァストで西門～宮殿跡～東門を見学 ルンビニ着 <b>【ルンビニ泊】</b>
8月28日 (火)	ルンビニ バイラワ・スナウリ クシナガラ	午前 午後	ルンビニ園参拝 ネパールーインド国境で入管手続き、国境通過 アーナンダ病院 施設見学、グプタ医師インタビュー 涅槃堂 (涅槃仏)、マター・クアル寺院 (最後の説法地)、 ラマパール・ストゥーパ (茶毘塚)、ヒラニヤパティ川 (最後の沐浴地) 参拝 <b>【クシナガラ泊】</b>
8月29日 (水)	クシナガラ	午前 午後	アーナンダ病院で待合所のペイント下描き、田んぼの草取りなど アーナンダ病院で子どもたちと交流 シルシア村見学 <b>【クシナガラ泊】</b>
8月30日 (木)	クシナガラ サールナート バラナシ	朝 午後 夜	ホテル発、ガジプール経由サールナートへ移動 サールナート州立考古学博物館見学 シルクの店 (オリエンタルテキスタイル) 見学・買い物 インド伝統舞踊「カタックダンス」鑑賞 <b>【バラナシ泊】</b>
8月31日 (金)	バラナシ サールナート  バラナシ デリー	朝 午前  14:30 15:30 23:00	ガンジス川 河岸散歩 チャウカンディ・ストゥーパ (迎仏の塔) 参拝 鹿野苑 アショーカ王柱、ダメーク・ストゥーパ、ムール ガンダ・クティール寺院 見学 バラナシ空港から空路、デリーへ 到着 空路、香港へ
9月1日 (土)	香港  関西国際空港	4:15 5:25 13:00	到着 空路、関西国際空港へ 到着、解散

## 福島 永久

(文学部 史学科 3年次生)

インドで過ごした8日間の一番の収穫は、「あたりまえ=ありがとう」であるということに気付けたことだ。たかが8日間と思われるかもしれない、逆にインドに行って8日間もかけてと思われるかもしれない。しかし、私にとってはされど8日間だし、悔しいことにここまででしか気付くことができなかった。

状況の違いから驚くべきことはたくさんあったし、身に染みて感じたことも多かった。水道水が飲めないこと、道路を歩く野良犬や牛などをはじめ、ただただ貧しい環境に対して驚くだけではなく、物乞いする子どもたちに対して何もできない無力な自分に憤りを感じたり、物がなくても工夫して暮らす人たちを見て、恵まれた環境にいて不満を言っていた自分が恥ずかしくなった。

8日間で経験したこと全てに意味があった。その中で、「あたりまえ」を「ありがとう」と認識しようとしたことが、私にとって一番大きな価値のある出来事だった。



## 西田 大介

(経済学部 現代経済学科 4年次生)

インドの田舎に住む人は全人口の63%を占める。そんな田舎では、外国人が珍しく、貧困に苦しむ子どもたちは外国人に物乞いをする。ガンジス川では大勢の人に物乞いをされた。小さな子どもはもちろん、赤ん坊を抱いたお母さん、手足がないことを見せ、お金を欲する老人など、衝撃的な経験であった。インドの貧困人口は約30%、そのうち人口の2/5が1日1ドル以下の生活をおくる現状に、この国の貧困の根深さを感じる。一方、BRICsの一角として著しい経済成長を遂げる都市部もある。その貧富の格

差こそが、大国インドの現実であると知った。

そんな貧しい生活の中でものんびりと素朴な生活を送りながら笑顔で生きるインドの人々を見ると、衣食住を確保されながら、いじめや自殺が社会問題化している日本とはまた違う幸せの形を見たような気がする。そして同時に、将来自分が日本とインドの架け橋となり、この国の真の豊かさに貢献したいと強く思った。



## 富谷 耕作

(法学部 法律学科 2年次生)

今回の旅で私の常識はことごとく打ち破られた感じがした。一番印象的なのは貧しさや不便さが不幸になっていないことである。常日頃からコンビニがあり、携帯電話があり、電気がつき、衛生的な物を口にすることがどれだけ尊いことなのか再認識させられ、それがさも当然のことだと考えていたことが間違いだと思えるようになった。きっと自分のなかの常識や固定観念が無意識に貧しい、発展途上の国は不幸で惨めなのではないか、だから今裕福な暮らしをしているのであろう自分たちが援助しなければいけないと勘違いしていたと思う。自分は大学生として残された最後の学生生活を使って世界を見てきたいと思っている。今回は自分の想像でしかなかった差異を確認できたとてもいい機会だった。最後に、このような素晴らしい出会いと機会に恵まれたことに心から感謝したい。



原 実花

(社会学部 地域福祉学科 3年次生)

近年めざましい発展をとげているインドであるが、実際に行ってみると街はゴミであふれ、人だけでなく犬、牛も食べるものを求めてさまよっていた。人々の顔に笑顔はなく、物乞いや売りつけなど皆生きていくことに必死なように感じた。しかしインド福祉村のアーナンダ病院を訪問し、ボランティアという形でたくさん現地の子ども達と触れ合う機会を設けていただき、遊んでみると日本の子ども達となんら変わりはない。普段貧しい生活を強いられるとはとても考えられず、皆、笑顔だった。外国人の人は本当に珍しいらしく、交流後に子ども達の村へ訪問すると子どもだけでなく、大人までも家から出て私達を見ていた。観光地と呼ばれる場所ではない本当のインドを見せていただいたような気がし、多くの外国人や観光客が普通に存在する場所になってほしいと率直に感じた。



河嵩 倫子

(社会学部 臨床福祉学科 2年次生)

私はこのプログラムに参加して、色々な人・環境（もの）に出会った。そして色々な衝撃を受けた。

まず人との出会いでは、福祉村を訪問した時のグプタ医師である。この村唯一の医師に出会い、この方の考えや生き方に感動した。「自分

の事よりも他人のために」の精神には考えさせられるものがあった。他には村訪問をした時の子どもたちである。貧しいなんて思わせないほどの笑顔で接してくれる姿に心打たれた。また、良い事ばかりでなく物乞いをしてくる人と出会い、みんな生きるためにやっているのだけれど始めは驚きばかりだった。

次に環境（もの）については、仏跡巡拝をする中でいろんなお寺や建物を見た。やはりインドはとても身近に宗教があることを感じた。とにかく何もかも派手であり、跪いてお祈りをしている人、牛がどれだけ大切にされているかということなど様々な発見があった。他に、ガンジス河に行った時も衝撃だった。茶色の水の中に裸になって沐浴している姿を見て正直引いてしまった。でも、神秘的なもの、これは良いものとして考えたら抵抗なく入れるというのを聞き、確かに普段何事においても意味があるものとしてとらえると挑戦できたりする。これと同じことだと思う。始めに先入観を持ってしまいうのではなく、視点を変えて考えることが大切だという事を改めて学んだ。

本当にインドに行って貴重な経験ができた。普段の生活の中で色々なありがたみを感じつつ経験した事を忘れず、何ができるのか自分なりに考えていこうと思う。



## ○海外体験学習プログラム／タイ王国【春季】

■参加学生	
藤澤 光汰 (文学部 英語英米文学科 2年次生)	横田 留衣 (社会学部 社会学科 2年次生)
桑原枝理佳 (文学部 英語英米文学科 1年次生)	土井 孟 (社会学部 社会学科 1年次生)
古川 喜一 (経済学部 国際経済学科 2年次生)	堀江紗友里 (社会学部 臨床福祉学科 2年次生)
山崎たかね (経済学部 現代経済学科 2年次生)	林 知輝 (社会学部 臨床福祉学科 1年次生)
西村 紗帆 (法学部 法律学科 2年次生)	島田 愛子 (国際文化学部 国際文化学科 1年次生)
梅村 剛史 (社会学部 社会学科 2年次生)	澤 佳苗 (政策学部 政策学科 2年次生)
■引率教員、テーマ	
舟橋 和夫 (社会学部 教授) 「タイの最貧地イサンでのムラおこしと生活」	

■行程			
日 程	場 所	時 間	活 動 内 容
3月6日(水)	関西国際空港発 バンコク  コンケン	11:00 15:45 18:25 19:25	集合 タイ航空にて空路バンコクへ バンコク到着 国内線にて空路コンケンへ コンケン到着 到着後ホテルへ移動 <span style="float:right">【コンケン泊】</span>
3月7日(木)	コンケン	午前 午後	コンケン大学 イサン概要の講義(スチン先生) コンケン大学の案内とコンケン市内の市場視察 <span style="float:right">【コンケン泊】</span>
3月8日(金)	コンケン	午前 午後	ノンベン村学校訪問 139名の生徒(幼稚園29名、小学校75名、中学校35名)と交流 ピーナツ村訪問(Mr. Thanong Parapan) ピーナツ栽培のみから第6次産業化(加工工程)を見学・説明 <span style="float:right">【コンケン泊】</span>
3月9日(土)	コンケン	午前 午後	充足経済村訪問(サムラン氏) キャッサバ栽培のみからため池による「足るを知る経済」 生活への変化 Sirin Thon 病院(阿部春代氏) ハンセン患者の病院と、コロニー住民との交流 <span style="float:right">【コンケン泊】</span>
3月10日(日)	コンケン	午前 午後	洪水村訪問 洪水と戦う状況を見学・観察 昼食後、小舟に乗って、水上からも見学 コンケン市内視察 <span style="float:right">【コンケン泊】</span>
3月11日(月)	コンケン バンコク	7:30 8:45 9:40 11:00 午後	空港へ移動 国内線にて空路バンコクへ バンコクに到着 JICA事務所視察(湯浅氏、小田氏) バンコク市内視察 <span style="float:right">【バンコク泊】</span>
3月12日(火)	バンコク 関西国際空港	9:00 11:00 18:10	空港へ移動 タイ航空にて空路関西国際空港へ 空港着後、解散

## 藤澤 光汰

(文学部 英語英米文学科 2年次生)

JICAは、技術協力・資金協力・ボランティア派遣・国際緊急援助など様々な援助を行うことで、それぞれの国が抱える課題に対して援助を行う機構である。タイでの事例では、見学・実習を行うことで、技術や知識を習得する継続的な援助や2011年にタイで起こった大洪水など突発的に起こる災害への援助など支援範囲は多岐にわたっている。

東北タイは経済成長が著しいタイの中で、最も経済成長が乏しく、農業に従事する人の割合が非常に高い。東北タイが一番生産性にも欠けている。所得格差が激しいタイで、それぞれの地域に応じた発展、開発が求められる。特に、東北タイにおいては主要作物である米の生産を維持するための水の確保が必要である。



## 桑原 枝理佳

(文学部 英語英米文学科 1年次生)

タイへ行き価値観を大きく変える事ができた。日本はよく「恵まれている」といわれるが日本が恵まれているということも生活のなかではあまり実感がなかった。タイへ行き日本は確かに常に安全であり、貧困層も少ないことが分かった。しかしタイのように人との繋がりが濃いわけでもなく、家族を養うという生活面でも「生活できてあたり前」で、人との繋がりが薄いところがある。タイは皆が全てに一生懸命で



家族や仲間を守ろうという意思がとても伝わってきた。そして小さいことに対して「幸せだ」という気持ちを常に持っていた。物は自分で作らなければ無いという状況だが精神的にはタイはとても恵まれていると感じた。

## 古川 喜一

(経済学部 国際経済学科 2年次生)

今回の海外体験学習プログラムでは普段は体験できないことや感じられないことを多く経験することができました。その中でも印象的だったことがハンセン病の後遺症のある人たちのケアに携わっておられる阿部看護師の活動を見学できたことと、コロニーでの子どもたちとの交流です。

阿部さんは長年タイでハンセン病の後遺症のある人たちの脚のケアをしておられる方で、その仕事は重要な仕事であるとともに、体力的にとっても大変な仕事でもあります。しかし阿部さんはとても献身的に後遺症のある人たちと接しておられて、心をうたれました。世界でこのように多くの人の為に活動しておられる姿を直接見て、海外で活動しておられる方の偉大さをあらためて感じました。

そして現地の子どもたちとも言葉は通じませんが楽しく遊んだりできて言葉がわからなくても気持ちは伝わるんだということがわかっていい経験になりました。



## 山崎 たかね

(経済学部 現代経済学科 2年次生)

私たちは、東北タイにある充足経済村に行き「足るを知る経済」を学んだ。東北タイはタイの人口の3分の1を占める地区であるが、GDPは低く貧困地である。主に農業を生活の糧にしているが、乾季には作物が採れなくなり、出稼

ぎに行くことが多い。自立した生活をするため、日本が協力して「農地改革地区総合農業開発事業」を行った。このプログラムは乾季にも農業ができるように土壌を改良し、ため池を作るものである。このプロジェクトを始めて10年以上経ち、村人の生活は変わった。出稼ぎに行っていた者が農業で生計を立てられ、外で作物を売ることによって収入を得ることが出来るようになった。子どもを学校に通わせることが出来るようになり、薬が買えるようになった。農民から農民へと農業の方法を教えるシステムができ、農民のネットワークが強くなった。貧しかった村人がこの日本が関わっているプロジェクトを取り入れることで収入を得られることは非常に日本人として嬉しいことである。タイの人達が親日家が多いのはこのような取り組みを日本人が行っているからではないだろうか。



#### 西村 紗帆

(法学部 法律学科 2年次生)

今体験でタイの本質を垣間見た。それはトップダウン体質でありコミュニティ形成の重要性である。洪水と戦う村では政府の作った堤防が水に浸かる期間を延ばし、状態を悪化させたのだ。この堤防により氾濫する川からため池への水の流れが悪くなり、排水が上手くいかなかった。これに対して村人たちが橋の建設を要求した。しかし政府は専門家を派遣し、その指示のもと実際には水門が建設されたのだ。トップダウンとは、政府は専門家の意見は鵜呑みにしても、村人たちの意見は聞こうとしなかったことだ。

そしてピーナッツ村ではグループで資金を出し合って副業としてピーナッツを加工販売している。付加価値を付けることで現金収入を増やし、生活改善が為された。充足経済村においても「足るを知る経済」を実施する上で土壌改善

のためのプロジェクトの学習会が行われている。コミュニティを形成することは生活環境や質を良くするための一歩であるだろう。



#### 梅村 剛史

(社会学部 社会学科 2年次生)

タイは、バンコクが発展を続ける一方で東北部など地方の村では貧困問題など様々な問題を抱えている国家である。私が今回のプログラムを通して訪れたタイ東北部にある幾つかの村の中でも深く興味を抱いたのは「洪水村」である。政府のプロジェクトの一環として建設されたダム・堤防によって、村に暮らす人々は様々な問題と直面しながら日々の生活を送っている。そして、村人の話を聞いている中で、それらの問題にはタイという国の持つ性質が深く関係しているということが明らかになった。また、それに関連して、問題解決に挑む洪水村の人々の行動も非常に興味深いものであった。



#### 横田 留衣

(社会学部 社会学科 2年次生)

タイの「洪水村」では、日本と同じく、政府と農村の連携が取れないことによる問題が発生し、それによる課題にも共通点があります。洪水村は、かつては一週間程度の短期間であったのが、政府の政策により、3ヶ月間、水がひかなくなってしまった村です。洪水村の意向を無視して、政府がトップダウンの政策をしたため、経済的損失、文化の廃頓、家族の変化など様々

な問題が起きました。また、一方的な政策によって村人は精神的・経済的な損失を被り、政府への不信感から、政府と農村間の関係は希薄化しています。日本国内でも、地域の意向が政府にないがしろにされることが多く存在しています。一方的な政策が地域の必要性に適切だとは必ずしも言えません。持続可能な開発のためには地域主体であることが不可欠であり、政府は地域の必要性を優先して連携し、支援することが大切であると洪水村を通して知り、日本においてもそれは今後の課題であると感じました。



土井 孟

(社会学部 社会学科 1年次生)

私は途上国開発関係の仕事に興味があり、実際に自分の目で見に行くことができるということでこのプログラムに参加した。タイに実際に行くことで自分が思っていた以上に高かった現地語の重要性と自分の英語の表現力のなさを実感し、日本に帰ってからの勉強の原動力になったと思う。開発事業に携わるコンサルタント会社の方や、JICAの方のような実際に途上国開発関係の仕事をしている人たちから開発プロジェクトの中で作成された報告書を基に解説をしていただいた。また開発の在り方や、自分たちが抱えている問題について話を聞いて、とて



も貴重な体験ができた。このプログラムは自分に様々なきっかけを作ってくれたと思う。

堀江 紗友里

(社会学部 臨床福祉学科 2年次生)

私は、今回の海外体験学習プログラムに参加を希望した理由として、タイの東北部とバンコクの貧富の差や貧困を目で見て、肌で感じたいということ、また、現地の人と交流し、彼らの生活を体験したいということも挙げていた。しかし、日本から出たことのない私は、貧富の差や貧困というよりも、日本との生活様式、街並み、文化、食事、人の違いに驚いた。実際は貧困であるはずなのにほとんど貧困ということが感じられないくらい、みんな優しく、笑顔で、幸せそうだった。日本とは違い、地域の人とのつながりがとても強いと感じた。また、タイの人たちと食事をし、遊んだことで、言葉は通じなくても、人は心で通じ合えるということ私たちに教えてくれた。日本にいただけでは学べないことを、海外ではたくさん学ぶことができる。今回学んだことを忘れず、これからの勉強や生活に活かし、機会があれば、このようなプログラムにどんどん参加していきたい。



林 知輝

(社会学部 臨床福祉学科 1年次生)

初めに驚いた事はさっきまで走っていた一本道そのものが堤防だったという事です。その堤防は望んでいたものではなかったそうです。堤防ができ水が流れにくくなり環境が変わってしまったのです。村の人達はこのままではいけないと考え、水をしっかりと流しつつ自分達も安全なようにコンクリートの橋を造る事を考えました。しかしタイ政府に任せた結果小さな水門が完成し、橋が欲しいと訴えても聞き入れてく

れなかったそうです。こういった経験から外の力を借りるのではなく、自分達を信じていこうと思ったそうです。

洪水と戦っている14村が協力しネットワークを形成しています。ネットワークで共有する事でより良い村づくりに役立てるそうです。ネットワークというものは相手の事を考え気遣えるからこそ成り立っているのだと思います。洪水と自分達でしっかり戦おうとする事が感じられ、協力する事の素晴らしさを教えてもらえました。



#### 島田 愛子

(国際文化学部 国際文化学科 1年次生)

私は今回の海外体験学習プログラムを通して人としての生き方を学ぶことができた。どんなに苦しい状況で過ごしていても、長い年月をかけた地道な努力を惜しまずに笑顔で明るく過ごす現地の方々を見て何度も心が打たれた。どんな裕福な人よりも、こちら側までもが笑顔になってしまう笑顔に向けてくださったタイの方々の生き方は本当に素敵だと感じた。どのような状況であっても自身の生き方に誇りを持って過ごせば最高の人生になる、そう感じた。私もこのような生き方がしたいと思った。過ごしていく中で大切なことを改めて考えることがで



きたこのプログラムは本当に大切な思い出となった。これから周りの人たちに伝えていくことや、実行していくことが今後の私への課題である。このような貴重な経験ができたことや感じたことを忘れることなく過ごしていきたい。

#### 澤 佳苗

(政策学部 政策学科 2年次生)

タイへ研修に行くきっかけとなった「農業の現状を知りたい」気持ちを胸に、日本を旅立った。私が印象に残ったのは、コンケン大学のスチン先生の講義と充足経済村訪問である。スチン先生の講義では、TPPに参加表明をしているにもかかわらず、小規模農家は依然反対しているという現状を聞いた。やはりタイは経済発展を目指すにつれて、農業に対しておろそかになりつつあるのではないかと感じた。しかしその後訪れた充足経済村では、国王が提示した「足るを知る経済」を実践しようと複合農業を行っていた。このプロジェクトのリーダーである、サムラン氏は「この農業は金儲けのためにやっているのではなく、自分たちの生活を支えるためだ」と繰り返しお話しされた。このことから私は、タイを世界一の経済大国にしようとするのではなく、自国の状況にあった発展を目指している姿勢を学び、日本でも活かせるのではないかと考えている。



## ○海外体験学習プログラム／フィリピン共和国【春季】

■参加学生	
板野 裕子（文学部 史学科 3年次生）	内藤 清信（社会学部 臨床福祉学科 3年次生）
岸田 渉耶（理工学部 物質化学科 2年次生）	上村 康弘（政策学部 政策学科 1年次生）
■企画団体、テーマ	
一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン 「山岳部のしょうがい児・者の暮らしとコミュニティ・ケアを学ぶ」	

■行程			
日程	場所	時間	活動内容
3月2日（土）	関西国際空港 マニラ	8：20	集合 フィリピン航空にて空路マニラへ
		9：55	マニラ到着
	バギオ市	13：20	バギオ市へ移動
		22：00	バギオ市着 【バギオ市泊】
3月3日（日）	バギオ市 カバヤン町	8：00	専用車でカバヤン町へ移動
		13：00	カバヤン町到着
		15：00	Ajuwan Therapeutic Center にて しょうがい児や保護者との交流 【カバヤン町泊】
3月4日（月）	カバヤン町	9：00 ～ 17：00	Ajuwan Therapeutic Center にて しょうがい児や保護者との交流 家庭訪問、地域散策 振り返り 【カバヤン町泊】
3月5日（火）	カバヤン町	8：00	カバヤン町散策
		～	
	バギオ市	10：00	バギオ市へ移動
		16：00	バギオ市着 ホームステイプログラム説明 【バギオ市泊】
3月6日（水）	バギオ市	終日	ホームステイ ステイ先の家族と過ごす 【バギオ市泊】
3月7日（木）	バギオ市	終日	ホームステイ ステイ先の家族と過ごす 【バギオ市泊】
3月8日（金）	バギオ市	8：00	バギオ市リハビリテーションセンター集合
		8：45	振り返り
	マニラ	11：00	マニラへ移動
		19：00	マニラ到着 【マニラ泊】
3月9日（土）	マニラ	午前	自由行動
		12：30	空港へ移動
	関西空港	14：25	フィリピン航空にて空路関西国際空港へ
		19：05	空港着後、解散

## 板野 裕子

(文学部 史学科 3年次生)

ツアーの中で一番私の印象に残っているのは、カバヤンでの家庭訪問だ。障がいのある人を支援しているスタッフの方についていて、障がいのある子どもたちとその家族のご家庭に訪問する時間をいただいた。私は、身体障がいをもつ子どもの家族に「この子は何をするのが好きですか」と問いかけてみた。返ってきたのは、「特にないよ。一日中寝ているだけだから」



という答えだった。その答えは、どの子どもも教育を受けられる日本の状態が当たり前である私にとって予想外で、衝撃を受けた。そのようにフィリピンの現状をこの目でみて聴きながら知り、日本と比較して様々な違いを実感することができた。また一言に障がい者の問題と言っても、実際には妊娠時や出産時の方法であったり、貧困の問題であったりと、幅広い社会問題が根底にある。ただ障がいのある人を支援するだけでなく、障がいのある人を減らす根本的解決の方法まで視野に入れるのが重要なのだと学ぶことができた。

### 岸田 渉耶

(理工学部 物質化学科 2年次生)

今回海外体験学習プログラムに参加して、多くのことを学び、考えさせられた貴重な体験となった。フィリピンは昔スペインの植民地であったために教会が立っており素晴らしい街並みであった。今回のプログラムの大きな目的としてしょうがい児の自立支援をしているJpCom-CARESの視察があった。JpCom-CARESはしょうがいがあっても必要なサービスや社会資源などの支援の乏しい山岳部の自立支援を目的としている団体である。

訪問してフィリピンではまだまだ日本のように支援がされていないと分かった。知った現状を周囲の友達、家族に伝え知ってもらいたいと思った。



1週間の滞在でフィリピンが大好きになった。なぜなら食べ物はおいしく、人はみな優しくまた2日間ホームステイもしてフィリピンの生活スタイルも満喫できたからである。ただもう少し英語ができたらもっと交流できたのではと後悔もできたプログラムであった。

### 内藤 清信

(社会学部 臨床福祉学科 3年次生)

フィリピンの山岳部の障がい児・者の暮らしを学びに行って、私の印象に深く残ったのは、自立した生活が送れるようになるためにアジュワントラベックセンターに来ている障がいのある子の親と交流会をした時のことです。取り上げている質問は二つで、一つ目が生活を送っていて大変なことで、二つ目が近所の人や周りの人は障がいのある人をどのように思っているのかということです。生活を送っていて大変なことはという質問には「移動」で、近所の人や周りの人は障がいのある人をどのように思っているのかという質問には「障がいのある人は家にいることがほとんどで、周りの人はどの家に障がい者がいるのかわからないだろう」という答えが返ってきました。



### 上村 康弘

(政策学部 政策学科 1年次生)

私たちは、首都マニラから車でおよそ8時間かけてバギオに行き、そこからさらに4時間ほどかけてカバヤンという山岳部を訪れた。ここではしょうがい児の家庭訪問をして、実際にどのように生活しているかを体験したり、しょうがい者を支援しているセンターの方に話を聞き、今フィリピン、特にカバヤンではどういっ



た支援、サービスが必要かを教えていただいた。カバヤンでの体験が終わると、ふたたびバギオに戻り、ホームステイのプログラムが始まった。これはしょうがい児を持つ家庭に2泊させてもらい、実際にしょうがい児が家庭でどのような

生活をしてるかを体験するプログラムであった。すべてのプログラムを終えて、フィリピンでのしょうがい者の理解を広めることの必要性を感じた。

企画名	体験学習プログラム報告会
実施日	2011年度 春季：2012年4月24日(火) 17時30分～19時00分 2012年度 夏季：2012年10月10日(水) 17時30分～19時00分 2012年度 春季：2013年4月25日(水) 17時30分～19時00分
場所	2011年度 春季：深草キャンパス 21号館401教室 2012年度 夏季：深草キャンパス 21号館403教室 2012年度 春季：瀬田キャンパス 3号館105教室
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター
参加人数	2011年度春季：約40人、2012年度夏季：約70人

■経緯・目的

国内・海外の体験学習プログラムに参加した学生が、現地でのどのようなことを学び、考え、今後のボランティア活動や大学生活等にどのように活かしていくのかを発表する機会として、プログラムの一環として報告会を行っています。より多くの学生に本プログラムに関心をもってもらうため、誰でも報告を聴ける形で実施しました。

■概要

参加した学生が、プログラムごとに、プログラムでの体験を通じて学んだことをそれぞれのスタイルで報告しました。プログラムに参加した学生以外に、プログラムに関心を持つ学生や、受け入れ先(スタディツアー企画団体)のNPOの方にも参加いただきました。発表概要は下記の通りです。



	訪問地・発表者人数	テーマ
2011年度 春季	タイ王国 プログラム参加者 5名	「スマトラ島沖地震大津波から7年。津波被災地の今を訪ねる。津波復興タイ感ツアー」
	フィリピン共和国 プログラム参加者 6名	「貧困の中で生きる人々と出会い、向き合う旅」
	ネパール連邦民主共和国 プログラム参加者 1名	「世界の屋根ヒマラヤの国 環境を守る「バイオガスプラント支援活動」
2012年度 夏季	タンザニア共和国 プログラム参加者 10名	「タンザニアで貧困者自立の道をさぐる」
	インド共和国 プログラム参加者 4名	「仏跡巡拝とインド福祉村を訪ねる旅」
	インドネシア共和国 プログラム参加者 3名	「希望の村の森づくり～出会おう！植えよう！苗を植えに行くプロジェクト」
2012年度 春季	タイ王国 プログラム参加者 12名	「タイの最貧地イサンでのムラおこしと生活」
	フィリピン共和国 プログラム参加者 4名	「山岳部のしょうがい児・者の暮らしとコミュニティ・ケアを学ぶ」

■参加者の声・得られた効果など

体験学習プログラムに参加した学生からは、同じプログラムに参加した学生同士で発表をま

とめることによって、体験したことを通して自分が感じたことを振り返るきっかけとなり、より学びを深めることができたという声が聞かれました。また、会場からの質問を受けて、現地で見聞したことを今後さらに調べたり、学生生活のなかで取り組んだりして、学びを継続したいという意見もありました。

#### ■コーディネーター所感

募集説明会、報告会ともに参加学生数が増加し、本プログラムへの学生の関心が高まっていると感じます。ただし報告会は、深草キャンパスのみでの開催となっているため、瀬田キャンパスの学生からは、「参加したいが参加しにく

い」という声も聞かれていました。このことから、2012年度春季の体験学習プログラム報告会は、瀬田キャンパスで実施してみました。

〈報告者：東郷 珠江  
(瀬田キャンパス コーディネーター)〉

